医挑む

第1部 寿都から

在宅療養と老老介護 2008年の厚生労働省の全国調査では、自らの終末期に自宅で療養することを「実現困難」とする人が66%だった。そのうち80%の人が「家族に負担がかかるため」と回答した。別の調査では、在宅で介護をしている家族の年齢は60歳以上が約6割と、老老介護のケースが多く、介護者へのケアも地域医療の課題になっている。

④家族を診る

介護 担い手の体調も

後志管内寿都町。海岸沿いに民家が点々と並ぶ小さな集落に、山下政一郎さん(93)の自宅はある。

町立寿都診療所の研修医、白衣を着た加藤光樹(こうき)さん(30)が、古いアルミの引き戸を開け、玄関にあがって声を掛けた。

「かあさん、元気かい？」

目も耳も不自由で、パーキンソン症候群を患う政一郎さんへの往診。しかし、加藤さんがまず、目をやったのは妻のサダ子さん(81)の顔色だ。

「夫を自宅で最期まで世話したい」というサダ子さんの願いをかなえたい。往診する加藤さんが気を配るのは、患者の様子だけではない

サダ子さんは政一郎さんの寝起きや食事、排便まで一切を支えている。

加藤さんは、政一郎さんの体調に異変が起きら言う。「サダ子さんの体調が崩れれば、政一郎さんの在宅療養は難しくなりますから」

寝室にトイレ

昨年10月、政一郎さんの血圧を測りながらトイレに行きたがるようになった。

トイレは寝室から約7メートル。高齢者にはその距離が長い。サダ子さんが両手で支え、政一郎さんはすり足。トイレまで5分近くかかり、用を足し、往復して15分。それが、日に2度、3度ある。

「夜、トイレまで連れて行くと、その後眠れず、私も昼間だるくなっちゃって」

加藤さんは、サダ子さんの体調不良を見かね、夜眠りやすくなる鎮静剤を政一郎さんに処方。さらに「介護保険を使って、寝室に簡易トイレを置きませんか」と提案した。「人の助けを借りたくない」と、介護保険の利用を嫌っていたサダ子さんだが、寝室にトイレを置くことには喜んだ。

診察室の外に

12月、家に簡易トイレが届いた。政一郎さんは寝室で用を足し、サダ子さんは寝起きを支えるだけで済むようになった。「何度も何度も、寒い思いをしなくていいね」。サダ子さんに笑顔が戻った。

患者の家族の見守りや介護保険利用の提案。それは、医師の本来の仕事ではない。

しかし、町立寿都診療所が掲げる家庭医療は、患者の家族の状況や地域の事情などにも気を配りながら診療することを目指す。

「診察室では見えにくいところに、健康を改善するカギがあることは多いから」。加藤さんはそう語った。

連載へのご感想をお寄せください。
▶Eメール iryou@hokkaido-np.co.jp
▶ファクス 011・210・5592